
いつもミクと六方

煉火赤駟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつもミクと六方

【Nコード】

N8737E

【作者名】

煉火赤駆

【あらすじ】

検事局で書類の整理をしていた六方悟検事のところに初音ミクがやってきて――。ロックマンをEXEしか知らない作者がロックミクを書いたんだZE

「ジャッジマン、そっちはよろしく」

検事局の事務室で僕は書類の整理をしていた。パソコンのデータの方はジャッジマンに頼んで同時進行。それでも大分時間がかかりそうだ。

本当はもっと早く済むはずだったんだけど、もう一人の担当者がコピー買いに消えたから、僕一人で作業中。

「検事さん、検事さん」

ゴドーさんめ、いつか生命維持装置にハッキングしようかと考えていると、パソコンの方から声が聞こえた。

『検事さん』って呼ばれても、この建物にいる人の九割以上は検事さんだよ？

誰のことかな？

「その黄色くてにやけた検事さん！」

っ僕！？

この検事局に赤くてかつこいい検事（きゃー）や青くてムチを持った検事や仮面でコピー好きな検事はいるけど黄色くてにやけた検事は多分僕だけだ。

慌ててパソコンの方を見ると、画面に長い青緑の髪をツインテールにした少女が映っていた。

「ミク」

僕はその少女の名を呼んだ。——初音ミク。ジャッジマン達ネットナビとは違うボーカロイドというプログラムだ。

「ミク、僕にはちゃんと六方悟ろっほうごって名前があるから」

「了解検事さん」

うわあ、わざとやってるのかな？ デリートしちゃおうか？

「初音ミク。よく来た」

「あ、ジャッジマン」

普通に応対するジャッジマン。

「ねーねー、ネギある？」

「ウム、ネギだな」

さらりと脇にあるフォルダからネギを取り出すジャッジマン。いつの間に用意したんだろ。

「で、何か用？」

「あつ、そうそう。実は……」

ミクはネギを片手に少し躊躇う仕草をしてから。

「ロックマンとのことについて相談に来たの！」

えええっ！？

全く予想してなかった話題に、僕は書類を床にばらまき、ジャッジマンはフリーズした。

「あの、僕達とロックマンの関係、わかってて言ってる？」

首領のワイリー様が捕まった今は真面目に働いてるけど、僕はネットワーク犯罪組織WWの元団員。ロックマンとはその時以来の敵同士だ。

「もちろんわかってるけど……ロックマンの友達に話したら本人に伝わりそうでこわいし」

それでね。いいよ。僕でよければ。

「ホントに！？」

画面いっぱいネギをぶんぶん振り回してミクが喜ぶ。

「うん、Wikiにまで性格歪んでるって書かれてる僕でよければ」
「えっ」

あ、今一瞬後悔した。すごく顔に出るね。削除したくなるぐらい。
「して、相談とは？」

ようやく再起動したジャッジマンが訊く。

「ロックマンとはある事件がきっかけで知り合って、それから友達として付き合ってたの」

あー、ロックマンってすぐそういう事件に首突っ込むよね。僕と

しては邪魔だけど。

「でも最近、ロックマンがあまり会いに来てくれなくて……」

「恋だね」

「…… ○×▲□!？」

僕の発言に顔を真つ赤にしてうるたえるミク。ネギ、振り回すとジャッジマンに当たるからやめてね？

「だって、ミクって結構人気のプログラムだね。特別な意味のある相手じゃなかったらしばらく会ってなくても気にならないんじゃないかと思って」

WWの方で有名になっても本業は検事だ。推理力には自信がある。

「とりあえず、バナー渡してみたらどうか？ 来易くなったら暇な時とか来てくれるかもよ」

「えっ、そんないきなり」

「ちつつち」

僕は人差し指を左右に振った。

「何もしないより、何かしてから後悔するほうがマシだと思うけど？」

——実際僕も、ずっと後悔してた。先輩が失踪する前に、何故止めなかったのか。WWの計画に荷担したのも、その後悔を振り切るためだったのかも知れない。

「——検事さん？」

ミクの声に、不意に我に帰る。

「なんでもない」

僕は茶を濁した。——WWみたいな古典的な悪役に湿っぽい話は似合わない、か。

「参考になった？」

「うん、ありがとう」

ミクは笑った。

「じゃあ、これからリン達とコンサートの打ち合わせがあるから」

「うむ、気を付けて」

手の代わりにネギを振るミクをジャッジマンが送り出す。
嵐が去った、そんな感じ。

「さて」

僕は改めて書類の整理を再開する。また余計な時間がかっちゃったな。ミクが居る間にバックグラウンドで作業を終了していたジャッジマンをプラグアウトして、散らばった書類を拾い集める。

その時、突然部屋のドアが開く。——ゴドーさん、やっと戻りましたか。そう思っただけで振り返ると。

「御剣先輩……」

「六方」

見間違いないような真紅のスーツ。整った顔。鋭い目線。

「先輩、なんでここに？ もう今日の仕事は終わったんじゃない」

「ム、そのハズだったのだが、最後にパソコンのメールを確認したところ、このようなメールが入っていたな」

まさか、また事件ですか！？

「いや、初音ミクという歌手のコンサートのペアチケットらしいのだが、一緒に行く相手が居なくなってる。どうだ、一緒に」

「はい！」

僕は力強く頷いた。

次の瞬間、勢いよくドアが開く。

そして、部屋の中に入って来たのは宇宙人……の格好をした警備員のオバチャン。

「アンタ、ミツチャンと二人っきりでデートだって！？ そんなのオバチャン許さないヨツ！」

カタカタカタカタ……

オバチャンは光線銃を僕に向けた。

やれやれ、どうやら敵役にハッピーエンドはまだ早いみたいだ。僕はロッカーの中からコピーロイドを引っ張り出した。

「プラグイン！ ジャッジマン トランスミッション！」

おまけ。

炎山「大変だ！ 東京地検でジャッジマンが宇宙人と戦っている！」
熱斗「なんで！？」

（後書き）

ロックミクと言いつつ落ちは六御でした。

ロックマンのセリフ一言もないし……

「ろつくみく」と「ろくみつ」って語感が似てるよね？ って発想で書いてしまいました。

別途ロックマンと逆裁のクロスオーバー長編も書いているので、最近六方検事がどっちのキャラだったのか忘れそうになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8737e/>

いつもミクと六方

2010年10月8日15時31分発行